

第 33 回 IRIDeS 金曜フォーラム

日 時：平成 27 年 11 月 27 日（金） 16 時 30 分～18 時

会 場：東北大学災害科学国際研究所棟 1 階 多目的ホール

テーマ：「非常事態と人間のふるまい」

1. 16 : 30 - 16 : 50（発表 20 分）

タイトル：「心理状態が車津波避難の効率性に与える影響」

話題提供者：奥村 誠（人間・社会対応研究部門 被災地支援研究分野）

東日本大震災後、津波避難計画における自動車の扱いが重要なテーマとなっている。当分野で、交通所要時間に着目する従来の交通工学の考え方から脱却し、時間的に変化する地点ごとの津波被災リスクを前提に、総リスクを最小とする避難パターンの計算方法を研究している。この時、パニックに陥った避難者は自分の前の車に盲目的に従い、交通情報や信号による制御が機能しない危険性がある。本発表では、研究内容の概要を述べ、上記のような避難者の「心理」が避難の効率性に与える影響について議論する。

2. 16 : 50 - 17 : 10（発表 20 分）

タイトル：「改訂後の津波警報に対する地域住民と大学生の認識と警報受信時の行動」

話題提供者：行場 絵里奈（人間・社会対応研究部門 災害情報認知研究分野）

2013 年 3 月以降、地震の規模が不確定な場合に予想される津波の高さを「巨大」（予想される津波の高さが 3m 超～だった場合）や「高い」（1m 超～3m だった場合）等の形容詞で表すように改訂した津波警報を受けた時の、人々の数量イメージ認識と意図される行動について、宮城県内の地域住民と県内外の大学生を対象に調査した。その結果、地域住民が津波の高さを気象庁の形容詞採用基準（「巨大」に対して 3m など）に近く想定する傾向にあり、逆に大学生は過大評価する傾向にあった。さらに、情報を受けた時に取ると意図される行動に対しては、学生が「高台」「内陸」に避難するというマニュアルベースの答えが多かったのに対し、地域住民の方々は、内陸や高台にとという回答よりも、地域それぞれで多種多様の避難場所を答えるケースが多かった。

3. 17 : 10 - 17 : 30（発表 20 分）

タイトル：「災害を生きる力の 8 因子と非常時の自助・共助行動」

話題提供者：杉浦 元亮（人間・社会対応研究部門 災害情報認知研究分野）

災害時の「生きる力」（危機回避・困難克服に貢献する個人の性格・考え方・習慣）の 8 因子と、津波避難時と避難所における自助・共助経験との関係について、東日本大震災被災者 1400 名の質問紙回答を分析した結果、6 つの因子が自助・共助経験の異なる側面に貢献していたことが明らかとなった。非常時の人間のふるまいについての研究に、心理学・生物学・組織科学・社会科学といった多様な枠組みが必要であることが示唆された。

4. 17 : 30 - 18 : 00 総合討論

総合司会：丸谷 浩明（人間・社会対応研究部門 防災社会システム研究分野）